

います。午前中の話で鈴木さんも「制度に対する信頼の失墜」を指摘されていましたが、そのようなものを高めるような役割がありました。

選挙後に起こった話ですが、政権交代が失敗したことで、フェイスブックの自分の写真のページを真っ黒にして抗議行動することが起こっています。

よく観察してみると、私の知る限り、フェイスブックなどの運動では、最初はこのように選挙不正の糾弾のようなことがあったのですが、徐々に「制度的な問題がある」ということ、午前中の話で言うところの「ゲリマンダリングがあるのだ」という話も出てきています。それが、今までの発表にもあったように、外に出てデモをするかたちにもなっています。

■「都市空間の政治」と「村落空間の政治」の分離と業績投票の可能性

最後に、私が2013年総選挙で考えたことを二点だけ挙げておきます。これは、2013年総選挙後のマレーシア政治のアジェンダでもあります。

一つ目は、もしかしたら、「二つのマレーシア」というべきものがマレーシアに現れつつあるのかなと考えています。つまり、反汚職、透明性を求めるような「都市空間の政治」という大きな政治と、身近な設備や施設の充実を求めるような、従来からBNが進めてきたような「村落空間の政治」とが分離しつつあるのではないかということです。

かつてのマレーシアは、エスニシティで簡単に分析できていたのですが、他の決定的に重要な対立軸が出てきているのではないかと。こうした「マレー／非マレー」、「ブミプトラ／非ブミプトラ」ではない、都市空間や村落空間の政治、社会的な分断が重要になってきているのではないかと。私自身は、こうした「都市空間」と「村落空間」の分断が、ほんとうにこれから顕著化するのに関心があります。

もう一つは、「業績投票」が見られるのではないかと考えています。とくにクダ州です。クダ州でPAS出身の州務大臣による州政権が「ノー」を突きつけられました。その一方で、スランゴール州は前回以上にPRが議席をとりました。政権交代は、連邦レベルでは次の選挙を待たなければいけないのですが、州レベルでは政権交代が現実化しています。そうすると、そこで行なわれる州政権のパフォーマンスが今後の評価の基準になるということが、新しく出てきた重要なアジェンダではないかと思っています。

質疑・討論

参加者

伊賀司(神戸大学)／加藤剛(総合地球環境学研究所)／金子芳樹(獨協大学)／鈴木絢女(福岡女子大学)／塩崎悠輝(同志社大学)／篠崎香織(北九州市立大学)／柴田直治(朝日新聞社)／鳥居高(明治大学)／西芳実(京都大学)／福島康博(東京外国語大学)／山本博之(京都大学・司会)／鷲田任邦(東洋英和女学院大学)

西芳実 伊賀さんの発表資料「ブルシ運動はなぜ活性化したのか——動員構造の変化」(資料40)に関して、「動員のメディアの変化」に「新聞を直接読まず、フェイスブックのリンクで情報を得る人々の拡大」とありますが、この人たちはフェイスブックがないころは、なにからどうやって情報を得ていたのでしょうか。

■ ブログ、フェイスブックが登場する以前は有権者はなにから情報を得ていたのか

伊賀司 とくに若い世代は新聞を読まなくなっています。新聞のどのセクションを読まなくなったということではなくて、新聞自体を読まなくなっています。

前の世代はおそらく新聞を読んでいましたが、私が指摘したのは、私のまわりのいわゆる知識人たちも「新聞の偏向はひどい。前は新聞を読んでいたけれど、もう食指が動かない。それよりはオンラインの情報のほうが信頼できるし、いろいろ選択肢がある」と言いだしていることです。

フェイスブックだけでなく、オンライン・メディアでいうと「マレーシアキニ」、「マレーシア・インサイダー」など、さまざまなオンライン・メディアが2000年代以降に次々と出てきています。そういったものを読むようになってきています。

西 それは「いまどうなったか」ですね。フェイスブックが出てくる以前はなにからどうやって情報を得ていたのでしょうか。前から新聞を読んでなかったのかもしれないし、身近な人から情報を得て判断していたのかもしれないとか、いろいろなことが考えられると思うんですが。

伊賀 基本的に選択肢がなかったのが、テレビや新聞が多かったはずで。それ以外には野党系のメディアもあります。1990年代までは、「ハラカ」(Harakah)なども読まれていたと思います。もちろん、エスニシティによってかなり違うと考えられます。華語紙はつい最近まで、情報の偏向の度合いでは他のメディア

と比べて比較的ましでした。ですから、華人は華語紙を読んでいたはずです。

しかし、つい最近の話になりますが、今回の選挙が終わったあとで、DAPがBNに入る可能性を「星洲日報」などの華語紙が一面で報道しました。これに対して、オンラインで「星洲日報を買わないようにしよう」という不買運動が起こったことも観察できました。

■ PRでもBNでもない

「non-partisan」を強調するNGO

加藤剛 新聞を読まなくなったのかもしれないけれども、政治に対する関心は逆に高くなったのですか。

伊賀 はい。

加藤 だから、「政府系の新聞を読んでもしかたがない」ということですね。

伊賀 そうです。

加藤 資料41「ブルシ運動はなぜ活性化したのか——フレーミングの成功」の部分で、「フレーミング」として「非党派」という言葉が出ていますが、マレー語なり英語なりで「非党派」を表す言葉があるんですか。

伊賀 私は英語での「non-partisan」などしか知りません。「非党派」というよりも「PRでもBNでもない」という話だと思います。

加藤 それを直接に訴えかけるような言葉は……。

伊賀 心に直接的に強く訴えかけるような言葉ではないと思います。

加藤 これは伊賀さんの言葉ですね。

伊賀 基本的に運動側がNGO主導で英語の「non-partisan」という点を強調するということです。

■ 選挙制度改革運動であるブルシが

PRへの投票につながったのはなぜか

福島康博 ブルシの「選挙制度を改革しましょう」という市民運動は理解できますが、それに参加することと今回の選挙でPRに投票することとは直接のつながりはないと思います。どうしてそのような行動に出たのでしょうか。

伊賀 直接は関連しませんが、すくなくとも間接的な影響があります。ブルシをどこまで広くとるかという問題はありますが、とりあえず投票率は上がりました。選挙制度や選挙自体に対する人びとの関心を高めたと言えると思います。選挙後にも、実際にはどうだったかはわかりませんが、選挙で不正が行なわれたと人びとが信じるかたちになっています。これらのことは選挙に関するブルシの効果です。

ですから、ブルシ運動を支えた人は、感覚的に言え

ばおそらくかなりの人がPRに投票したと思います。ただし、実際のところはどこまでPRの支持者かはわかりません。

福島 「アラブの春」の場合で言うと、あれだけ「ムバラク政権打倒」と言いながら、選挙をしてみたら、そちらに票が入りませんでした。「アラブの春」の行動を起こした人たちが政党をもっていなくて、その勢いを議席というかたちで政治に反映できなかったため、そういう結果になりました。マレーシアの場合は野党がしっかり受け皿になれたという気がします。

伊賀 すぐにデータは示せませんが、私もその感覚があります。申し上げたように、もともと野党のコミットメントが強いわけですし、実際に、10万人規模になれば別ですが、2万人や3万人の規模だと、野党が支持者を動員するというのが大きいと思います。

野党かNGOかというのはきっちり分けられなくて、ブルシ2.0はラベルとして「非党派だ」と言って人々を動員していきます。デモの際の動員や実際の活動で野党とこの運動がリンクしている一方で、運動の中心的指導者は野党と一線を画そうとしています。

■ ブルシの根幹にあるのは

独裁的な政権を「変えたい」という思い

金子芳樹 非党派というのは、たしかに政党を特定して支持しているわけではないということもありますし、選挙制度改革から始まっていて「制度を変える」ところからスタートしているという話はあるのですが、それが活性化して盛りあがるプロセスにおいては、やはり長期政権の現状維持体制に対して「変えたい」という欲求が入り込んできて、それが広い大きな流れをつくっていくように思えます。

ただし、選挙をしたらそれが野党に行くかという、かならずしも野党では満足できないという層もあると思います。全部を野党が引きとれるとは限らないし、野党の指導者がブルシに出てくると反発する運動家もいるかもしれません。そのような意味で、ブルシのような運動は、漠然としていて、大きく寄せ集めてきているけれど、それは独裁的な政権に対する「変えたい」という気持ちの集約とはとれませんか。

伊賀 おそらく合っていると思います。付言するならば、ブルシの活動家を中心に言われていることですが、「長期政権を支えるのは選挙上の不正だ」という原理です。たとえば、登録名簿に不正が行なわれていて二重投票ができるようになっているからこそ、BN政権は、たとえば1999年のときも、あるいは2008年も、

ギリギリのところまで勝っています。ブルシのリーダーたちは、「接戦になればなるほど、そういうものが効いてくる」という言い方をします。

金子 たしかに流れはそうだし、理論家はそのように説明するけれど、大衆がドッと入ってくるモチベーションはもう少し単純ではないですか。

伊賀 もちろんそう思います。とくにブルシ3.0の場合は、ブルシ2.0が起こったあとにワートと集まってきました。私の聞いた限りでは、「ブルシ2.0に参加できなかったから今回は参加する」という人もいました。「ブルシ2.0のときはまだ怖かったけれど、もう出てまいりようぶだ」ということでワートと集まって、10万人規模のデモになったという話をクアランプールで聞きました。そのような雰囲気があったというのは、おそらくその通りだと思います。

参加者1 八つ挙がっている選挙制度改革の要求(資料38)のうち、投票に関する直接的なものは①から③までですが、これをアピールすることは戦略的なことですか。この要求を見ると、ほんとうに変えるべき司法制度、反汚職委員会、選挙管理委員会等の公的制度とか、メディアの自由で公平できちんとした発言とか、政府の介入とかいった本来の自由民主的選挙に伴うものではなくて、投票の現場で見られる不正がたくさんあることをアピールしています。ブルシは大衆を動員するために堅いレベルの本質的な改革はあまり前に出して要求していないのですか。

伊賀 ブルシの要求の仕方はおもしろくて、すぐに変えることができる①から③までと、残りの長期的に変えていくべきものとに分けて要求をしています。しかも、社会運動としてデモがクローズアップされがちですが、じつはブルシは選挙管理委員会と何回も何回も実際に交渉を行なっています。どこまでほんとうかはわかりませんが、彼らのロジックでは、「要求しつづけてもいつまでたっても受け入れられないからデモをやる」という話になっています。

■ フィリピンやタイのように 街頭運動が政権転覆に結びつく可能性は

柴田直治 選挙前に選挙改革を訴える大きな集会があり、選挙は高い投票率でした。しかも若い有権者も多く参加しました。それでも政権は交代しませんでした。ところが得票率は野党のほうが上回っているという状況です。それでは、今後このような運動はどうなるのでしょうか。フィリピンやタイの赤色・黄色のように、街頭運動が反政府運動に結びつくんで

しょうか。フィリピンの場合はそれが2回も政権転覆につながっています。

今後の予想としては、これで矛をおさめるのか、さらに街頭運動が過激派化するのか、あるいは、要求の前面に出ないのが不思議ですが、1票の格差やゲリマンダーの修正などを求める運動になるのか。このあたりの見通しはいかがでしょうか。

伊賀 デモが過激化して街頭行動による政権転覆に突き進んでいく可能性は、全くないとはいいませんが、現在出ている運動の指導者の言論などを見ると、おそらくそこまでは行きません。私が情報をキャッチしている時点では、「あくまで選挙制度改革に特化する。ここで戦う」と言っています。

選挙直後には「不正な選挙が行なわれている」と盛り上がりましたが、徐々に「次の選挙に向けて」という話になっています。「もう少し改良主義的にやっ払いこう。この運動を続けていこう」という話になりつつあると思います。

フィリピンやタイのように、最初から政権交代やだれかを引きずりおろせという運動ではなくて、根っこはあくまで「選挙制度を改革しよう」、「八大要求を掲げよう」というところから始まっています。見てみるとまだわかりませんが、おそらくフィリピンやタイのようにはならないと思います。

福島 ブルシ以外のものが出てきて、このような要求を突きつけることはあるのでしょうか。

伊賀 たとえば、報告で申しあげたヒンブナン・ヒジャウのような運動が考えられます。これは反ライナス(Lynas)運動といって、パハン州にある工場がレアアースの精製過程で核物質を出すことに反対する運動ですが、ある意味でブルシと重なるかたちで出てきています。この運動も多くの人びとを動員しました。こうした環境運動のようなものがマレーシアで今後高まる可能性は充分にあります。

■ デモによる不満の発散はあっても秩序もあり 一気に政権を変える切迫感はない

柴田 午前中の中村正志さんのお話で、選挙制度、とくに州ごとの議席が憲法で決められていて、ゲリマンダーも横行している。それでも憲法は3分の2以上の賛成がないと変わらないということでした。街頭運動で政権を転覆するのでなければ、すくなくとも近未来においてはなかなか政権交代にはいたらないということになります。けれども、実際の投票者数で言えば今後も野党が勝ち続けるとした場合、マレー

シア社会はその矛盾を抱えていっておさまる社会なんでしょうか。

伊賀 将来予測なのでおさまるかどうかはわかりませんが、すくなくとも新しい現象であることはたしかです。これまでのマレーシアではエスニシティが前面に出ていました。それがあまりにも大きな要因だったからこそ、みんなそれに絡めとられていましたが、私が挙げたような都市と農村の亀裂とか、新しいイシューが出てきました。

これがどうなるかについては、「観察させてください」としか言いようがありません。現在の段階で言うと、デモを起していますが、そこで一気に政権を替えようというところまでは行っていないと思います。不満の発散はありますが、秩序だっている行っている、依然として運動側は人びとをコントロールできていると思います。

柴田 それはやはり経済の要因のためですか。ようするに、フィリピンなどに比べたら経済状況が悪くないから、そこまでやっても暴力に結びつくまでの切迫感がないという……。

伊賀 この運動が中間層主導ということは、おそらくそうなのでしょう。経済面で言うと、貧しい人の運動ではありません。そういう人はもともと参加しません。ただし、私が考えているのは経済格差ではなく情報格差の話です。

■ 平和を失う行為への自制と、既存の制度でいずれ勝るとの期待が反政府運動の発展を抑えている

篠崎香織 マレーシアの人びとは、自分たちの手で平和を壊すことがもっとも愚かなことだと認識しています。ルールを無視して力で状況を変えることだけは避けようという自制がかなり効いていると思います。できる限り大きな声をあげるけれど、「最初に手を出したら負け」ということは広く共有されていると思います。

鈴木絢女 篠崎さんが挙げたことはとても重要だと思います。制度そのものを否定して権力をひっくり返すまでの行為に出るのはなぜかという動機を考えたとき、「既存の制度に乗っていたら絶対に一生勝てない」という絶望感は大いだと思います。

たとえば、フィリピンでマルコスが追放された「ピープル・パワー革命」のときは、あからさまな不正選挙がありました。だれの目からどう見ても不正だったわけです。「こんなのやられるか」ということで、人びとは制度もなにも無視して街頭に出ました。

タイの場合、2006年のときも、ふつうに選挙をす

ると、農村部のほうが圧倒的に人口が多いので都市の人たちは負けます。「多数決で決めたら我々は負け続ける」と思った都市の中間層が黄色いシャツを着て出ていったという側面があったと私は思っています。

マレーシアでは、ブルシであれ野党であれ、そこまで絶望的かというと、「もう少し既存の制度に乗ってゲームをしても勝てる見込みがある」と思っているのではないかと思います。野党の人と話していると「次の選挙ならいけるかもしれない」と言っています。

今日の発表でお見せした資料にもあったように、得票差がごく小さい選挙区がかなりたくさんあります。それを考えると、「積み重ねていけばひっくり返すことが可能だ」と当事者が考えたとしてもおかしくなくて、そういう理由でおそらく反政府運動には発展しないだろうと私は思います。

■ 「PASも許容範囲」と示すことで UMNO、PAS 双方に存在を意識させた華人

金子 PRの政党どうしがほんとうに組み続けられるのかに関して、篠崎さんに質問です。

華人のあいだでもイスラム教に対する見方が変わって、許容範囲が広がっているのではないかと思います。これはイスラム教に対する漠然としたイメージの変化なのか、それとも、塩崎さんはPASの本来のねらいはイスラム国家建設であって、それは動かしがたいものだと言われましたが、そこまで理解したうえで、「もしイスラム国家が建設されたとして、自分たちはそのなかで許容して生きていける」というところまで踏み込んで変化があるのかということです。塩崎さんのPASの話と重ね合わせてみると、今回DAPに投票した人たちの考え方でだいじょうぶなのかなという気がしないでもないですが、そのあたりはどうでしょうか。

篠崎 PASの指導者は、イスラム刑法を導入してもムスリムにしか適用しないとやってきました。以前は、華人はこうした主張への聞く耳をほとんど持たず、とにかくPASに対する拒否感が強かったと思います。それに比べると、現在では相手の主張を聞けるようになっていると思います。

その動機は、まずUMNOへの圧力を強めたいというところにあると思います。UMNOは「華人はPASを支持しない」と安心していただけるところがあるように思いますが、「PASも十分に許容範囲」と示すことで、もはやUMNOは華人の支持を安心できない状況だと伝えるということです。また、「PASにとって華人票の

獲得はもはやネックではなく、UMNOと十分対抗できる」と伝えることで、PASに対して自分たちの声を聞かせようと意識させることにもなります。

PAS指導者の発言をそのまま受け入れることは楽観的にすぎるかもしれません。しかし、イスラム国家建設が現実となったときに、現在のPAS指導者の発言の内容を大きくはずれて華人に極端に不利な状況が進展する根拠も特になく思っています。

マレーシアにおけるイスラム教のあり方について、人道性に照らしてより柔軟で多様なあり方を模索する試みが、とくに文芸の場で活発に行われています。これはムスリムのムスリムに対する呼びかけであると同時に、ムスリムは本来人道的で柔軟で多様であることを非ムスリムに呼びかけるものともなっています。そうした活動が非ムスリムに届きつつあるという側面もあるかもしれません。

塩崎 篠崎さんが指摘されていたとおり、本質的には互いに利用できるから利用しているのであって、華人にしてみればUMNOとPASが分かれて、そのあいだで華人がキャスティング・ボートを握っている状況が望ましいから今回PASの側に立ったというのが圧倒的な理由だと思います。

参加者2 逆に言うと、政権をとったあとのビジョンは考えられないということですか。

伊賀 今回の選挙で必ず言うのが「ubah (チェンジ)」です。とても雰囲気重視のスローガンではありますが。私もチェラマなどいろいろなところで会話したところ、その先のことなく、「PRに一度チャンスを与えてみよう」という雰囲気がとても感じられました。

篠崎 具体的な政策という意味では明確なビジョンはないかもしれません。その一方で、華人には、直接に個々の利害に繋がらなくても、政府がどれだけ華人社会について考慮しているかを図る争点がいくつかあって、それに照らすとPRが政権を執った方がより望ましい状況になると華人は期待しています。そうした争点の一つに、華文独立中学の卒業資格の承認があります。BNは今に至るまで承認していませんが、PRは選挙のマニフェストで承認するとしています。

華人のUMNOに対する反感は、昨今とても強まっているように思います。華人の目には、UMNOの指導者は反華人的な言動を繰り返し、反華人的な言動をする人を野放しにしていると映っています。今回の選挙では、華人の反感をたびたび買う言動をする人物がUMNOの公認を得て立候補しています。華人には

UMNOがとにかく嫌で替えたいという気持ちがとても強いように思います。

■ UMNOの抑制を期待する 華人の思いに応えられなかったMCA

鳥居 1990年代初めにマハティール政権が一気に自由化政策を始めて、華人社会はそれまでほしかったものをほとんど手に入れて喜んでいました。それで1995年の選挙でMCAが大勝利を収めました。そうすると、1995年からの20年間、マレーシアの華人社会をウォッチしているみなさんからすると、華人社会はなにを問題にしてきたんでしょうか。これまで抑圧されていたものが1990年代半ばにみんなとれてしまったので、MCAはある意味ですることがなくなったと私は思っています。

私はずっと経済を研究してきたので経済人と話をする機会がよくあり、中小企業の支援策の話は何度か出ていました。実態として中小企業は華人がしているけれど、政府はマレー系を育てようとするため、支援策に大きなギャップが生じてしまっただけかなわないという話がありました。それを念頭に置いて今日の発表のDAPとMCAの資料を見せてもらって、「MCAはネガティブなことしかしなかったのか。それでは支持は得られないな」という印象をもちました。

篠崎 1970年代から1980年代にかけて華人が求めていたものは、ご指摘の通り、1990年代にかなり手にすることができて、MCAはしばらくその功績で評価されてきました。MCAは同時に、「下水が壊れたから直してくれ」といった生活インフラの整備などの日々の生活の改善を求める声に地道に対応して、それもあり評価されてきました。

しかし、2008年総選挙の前あたりから、それだけが政党の仕事なのかと問われるようになってきました。華人はMCAやGerakanなどの政党に対し、UMNOから取り分を取って来るだけでなく、UMNOの勢力を抑制する役割も期待します。しかしMCAやGerakanは、その期待に応えることを放棄したと見なされました。2008年総選挙でDAPなどの野党の議員が多数当選して、野党もMCAのようなサービスセンターを設置します。生活の改善をめぐる行政との折衝はMCAでなくてもできるということになります。そのなかで、MCAは大きな成果が出ていない案件ばかり注目されることになりました。先ほど述べた華文独立中学の卒業資格はその一つです。こうして、MCAはUMNOの前で無力だという評価が下されてきました。

■ UMNOが右寄りにシフトしたのは どのような戦略があったのか

鷺田任邦 篠崎さんにお聞きします。今回の選挙とは直接関わりはないのですが、UMNOが前回の選挙の前に急進化して、華人の支持が一気に下がりました。UMNOは1990年代以降、華人の票にかなり依存してきました。それがわかっていたのに、なぜUMNOは華人を排斥するような急進的な言説を野放しにしたんでしょうか。意図的に右寄りにシフトしたのは、なにか戦略があったのか、それとも単なる戦略的なミスなのかをお聞きしたいと思います。

篠崎 UMNOは、華人票に依存していることがわかっていただけない、マレー人票の回復に力を入れざるを得なかったと思います。塩崎さんが指摘されていますが、UMNOとPASはマレー人票を獲得するためにイスラム化で争っていたけれど、イスラム化でできる政策はかなりの程度で実現してしまい、飽和状態になってしまいました。そこで「マレー人の権利の死守」が強調されるようになって、その状況が現在に至っているということだと思います。

■ 都市部と村落部の情報格差に ブルシはどのように対応できるのか

鷺田 伊賀さんにお聞きします。票の格差があるなかでは、いくら都市で勝っても選挙では勝てません。そのことがわかったとき、ブルシなどは地方でどのような活動をするのでしょうか。伊賀さんがおっしゃっているように情報格差の問題であれば、情報さえ与えれば解決できる問題かもしれませんが、既得権益の獲得などの問題であれば、情報を流しても解決は難しいだろうと思います。

伊賀 ご質問は、都市部と村落部の格差にブルシがどのように対応できるかという話ですね。現在の段階でブルシが、たとえばサバやサラワク、あるいはフェルダに行って、組織的になにかをしているということは、そんななないと思います。

ブルシのリーダーの一人であるヒシャムディン・ライス (Hishamuddin Rais) というマレー系の運動家は、個人的にフェルダに行ってブルシ活動の演説を打ったりしています。しかし、現段階ではブルシが組織的に動いているという感じではありません。

■ 民族・言語を超えて情報が伝わり バーチャル集団ができることの可能性と危険性

鳥居 ブルシとかフェイスブックの世界は、多言語で、いろいろな民族の言葉が飛びかっているものな

のですか。

伊賀 多いのは英語ですが、華語もあります。華語紙や華人活動家が作った写真や表をそのまま自分のページに貼り付けて、その下のコメントが英語やマレー語になって混在していることもあります。英語が多いことは多いですが、かなり混在しています。

篠崎 華語をメインとする個人や団体もたくさんあります。

鳥居 なぜそんなことを聞いたかという、先ほどの質問に戻るんですが、不正があるとか、選挙のときに違反をしているという話は、目の前で起こってそれを見ているという話ですが、それがインターネットの時代になると、電子情報としてボンボン飛び始めるということが起こるわけです。

先ほどの西さんの質問で言えば、これまでこのようなことはコーヒーショップで話されていて、コーヒーショップの世界でした。コーヒーショップの世界の話がフェイスブックなどでボンボン飛ぶようになって、不満がどんどんふくれあがっていく。これまでは民族というかたちで遮断されていたものが、フェイスブック上でバーチャルな集団のようなものができていて情報が遮断されなくなっているのであれば、それはかなり重い問題、大きな変化だと感じます。

これまでは制度上の瑕疵のようなことでなんとかなっていましたが、得票率までひっくり返ってしまうとなると、これまでどおりでいくのかなという疑問はあります。

■ 華人の対応は既存の枠内に収まるものか 新たな動きと捉えるべきなのか

山本 都市部のPR支持者が「みんなで田舎に投票権を移して投票しよう」という話にはならないんですか。そうすれば制度を変えなくても勝つ可能性が出てくるんじゃないかと思うんですが。

伊賀 そこまでの話は聞いたことがないし、それぞれ仕事もあるから考えにくいと思います。ブルシの中核の人たちの活動は選挙管理委員会とのやり取りですが、参加する大多数の人びとには、雰囲気には押されて集まったというところがあります。

ブルシの活動は二本立てです。一本はデモなどですが、もう一本では実務的に選挙管理委員会などと丁々発止やっているとあります。しかし、これは少数で、農村に行くという話でもないと思います。

山本 そうすると、今回の華人の対応は、篠崎さんの言葉で言えば「決まりは決まり」とか「華人は政治に無

関心」という枠の中での対応ということになって、その部分では大きな変化はないと考えていいですか。別の言い方をすると、街頭に出かけているといってもそれは大きな変化ではなくて、従来の政治の変化を大きく超えていないという理解でよいですか。

「決まりは決まりだから」とか「華人は政治に無関心」といった理解の枠を大きく崩すものではなくて、その枠の中で——「ピクニック気分」と言うに参加している人たちには悪いですが、半分お祭りのような感じで、みんな同じ服でコーディネートして、そのなかに自分が位置づけられて盛り上がりはするけれど、さらに一步自分で足を踏み出して政党活動をしたり政府を倒そうとまではしないという話ですね。それをまとめて「華人は政治に無関心」という従来の言い方の中に納まっていると理解してよいですか。

篠崎 「決まりは決まり」という点については、確かにあまり大きな変化はないと思います。そういう意味では、政治へのアプローチはあまり変わっていないかもしれません。現在顕著な現象は、政治に動員される人が若い世代やこれまでマレーシアに背を向けていた人たちを中心に大きく増えて、その大部分が政府に批判的な立場を取っていて、その人たちがフェイスブックや街頭活動で結びつきを得ているということかもしれません。ただし、お祭り気分で集まる人たちのなかから、政治に対する新しいアプローチが今後現れるかもしれないと思います。

伊賀 街頭に出ること自体に恐怖がなくなったとか、お祭り気分で出られるようになったということは変化ではないかと思います。外に出て何十人集まるとか、デモでシュプレヒコールをすることかいうことは、新しい現象だと思います。お祭り気分、楽しい気分、ピクニック気分ではあるけれども、それが直接に政権を倒すところまで行くか行かないかというのは別の問題としてあって、外に出て自ら積極的に意見を表出すること自体が新しい現象だと私は思います。

■ ブルシの展開を支えているのは

ルールの適切な運用を見守る余裕ある人の存在

西 伊賀さんの報告を聞いていて思ったんですが、ブルシのようなものが展開した背景には二種類の可能性があると思います。一つは、BN体制というか、政府に交渉してさまざまなものを引き出さないと生きていけない人たちが、ずっと排除されているから生きていくためには取り返さないといけないという考え方が結実したという可能性です。

もう一つは、そうではなくて、「政府に保護されなくても生きていける。むしろ政府に保護や管轄されていないスペースを拡げたい。好きにさせてくれるスペースさえ確保できれば、あとは自分たちでなんとかするのでどうでもいい」——と言うと言い過ぎかもしれませんが、そういう考えが強くなったという可能性です。

ブルシの活動が野党から離れてNGOが中心になったという話は象徴的だと思います。政権をとりたいたわけではなくて、政府を観察していて、正しくやってくればいいし、野党に対しても文句を言うつもりはあるということだと理解できます。与党を倒したい、こっちの政党を政権につけたいということではなく、ルールが正しく実施されていることを「清く正しく」見ていたい。そういうことを余裕をもって言える人が増えてきたからブルシのような運動が出てきたと理解できるお話でしたが、そうではないのでしょうか。

伊賀 私は後者だと思います。基本的に余裕があるし、ギリギリの生活の話ではありません。その一方で、やはりルールはルールで、「ルールをちゃんと守ってください」、「透明化してください」という点についてデモ参加者たちは我慢がならないということです。その過程でNGOが主導するようになって、野党ともつながりはありますが、NGOがアンワルを批判することもしばしばあります。ですから、カッコつきの「非党派」ともいうべき、与党対野党の対立軸ではないようなものが、この5年間でマレーシアで活性化しつつあると私は思っています。

西 ほんとうに生活に密着した問題になっているのなら、先ほど山本さんが言ったように、PRの支持者が一斉に農村部に行って投票しようということにもなると思います。そうならないということは、その程度の切実さしかない問題なのだと思います。

伊賀 生活に密着した言葉ではなくて、「トランスパレンシー」(Transparency) や「ガバナンス」(governance) などの新しい言葉が2008年以降に拡がっていると思います。私はNGOのことも研究していて、かつてはNGOや市民社会は「コラプション」(corruption) と言っていましたが、最近では「ガバナンス」という言葉を使いだしました。そこのところはかなり違いが出てきていると感じます。

加藤 先ほど公務員が話題になりましたが、都市空間の政治のなかには、公務員でなくても、給料とりの中間層、ホワイトカラーの人がいるわけです。そうい

う人たちが公務員よりブルシに参加している可能性が高いわけですか。

伊賀 その可能性が大きいと思います。少なくとも私は、従来のレフォルマシ運動の時と比べると、ホワイトカラーの人はかなり積極的だと見ています。その一方で、若い世代で争点として挙げられるのは、大学を卒業しても仕事がないけれど、食っていけないほどでもない。あるいは、仕事を見つけて食ってはいけるけれど、この体制になんとか不満がある。そのようなものをすくい上げているのではないかと思います。

■ ムルデカ・スタジアムで開催することの 政治的な意図と戦術

加藤 ムルデカ広場やムルデカ・スタジアムというのは、トゥンク・アブドゥル・ラーマンが独立宣言をした場所ですね。ここで開催するというのに対して、単にスペースが大きくてたくさんの人が集まれるということだけではなくて、そういう政治的な意味合いも与えられていたのですか。

伊賀 もちろんです。運動側はそれをねらって場所を設定しています。ムルデカ・スタジアムでもやるし、ムルデカ広場でもやります。ただし、この二つの場所には少し違いがあります。建築上の違いと言われたらそれまでですが、ムルデカ・スタジアムは小高い丘の上であって外から見えにくくなっていますが、ムルデカ広場はスクエアになっています。運動を「拡散させる」という意味合いで、戦術的にはムルデカ広場のほうがよかったということをオーガナイザーから聞いたことがあります。

場所の設定には明確な意味があって、最初から意味を考えています。ブルシ1.0のときはパレス（王宮）に行きました。そこでメモランダムを出しました。次はムルデカ・スタジアムで、パレスではありません。最後にムルデカ広場に行きました。彼らはかなり意図的に場所を設定しています。

加藤 そういうことは情報として発信されているわけですか。

伊賀 そうです。どこまで言ってよいのかわかりませんが、「あくまでこれはナショナルな運動です」と言っています。非党派と言いましたが、彼らは「どこかの党派運動ではなく、マレーシア全体の運動で、ナショナルな選挙制度を改革するという観点で重要な運動です」と言います。ロジックのうえでは、「野党活動に利するから行っているのではなく、マレーシア人のためにしている。国民全体にとって選挙制度改革

は重要だ」と言います。

■ 華人は連邦政府とのチャンネルを失う覚悟で 野党に投票したのか

山本 華人のDAP支持は、BNと別れてDAPと運動をともにする覚悟のうえでと考えてよいですか。それとも、場合によってはDAPと別れて、なんらかのかたちでBNかあるいは別の形の与党連合にへら替えることもあるということでしょうか。華人は政府にどのように代表を送ろうと考えているのですか。それとも、政府に代表を送らなくても、DAPを支持して野党のままでいいと考えているのでしょうか。

篠崎 華人が政府にどのように代表を送るのかについては、これからさまざまな調整が図られることになると思います。華人はこれまでMCAなどのBN内の華人政党を通じて政府に代表を送ってきました。華人の関心が高い案件を扱う省庁には、MCAやGerakanから大臣や副大臣が任命されてきました。地方レベルでも、郡や市の議会や、華人人口の21%が居住する新村の村長などの役職に、MCAやGerakanの党員や、これらの党の推薦を受けた人が就いてきました。

地方レベルの役職の任命権は州政府にあって、2008年に州政権がPRに移った州では、これらの役職をPRが任命することになりました。新村では、州政府が任命した村長のほかに、連邦政府が任命した村長がいるという状況も見られるようになりました。このことは、新村の人たちが野党の州政府と与党の連邦政府の双方と関係を持つことができたということになります。

しかし今回の総選挙では、既存のチャンネルを失う地域が出ることになりました。MCAは2011年の党中央代表大会で、来る総選挙で2008年の総選挙より成績が悪かった場合は政府の官職につかないと決定しました。それに従って、今回の選挙ではMCAからは誰も入閣していません。Gerakanからも入閣者はいません。地方レベルでも、郡や市の議員や村長を辞するMCA党員が続出していると聞きます。役職を辞することになるMCA党員の数は、中央から村レベルまで全国で約1万1,500人とも言われています。

PRが州政権をとる州では、人びとはPRの代表者を通じて州政府と関係を構築することができます。しかし連邦政府が予算を策定している助成を申請する場合などは、連邦政府が任命した村長のサインが必要とされるケースも多く、ここを誰がどのようにつなげるのが問題になってきます。マレー人の村長や議員に頼むという声もあります。また、今回は、BN

が州政権をとる州で事態は一層深刻です。州政府と連邦政府の双方に対して、MCAあるいはGerakanというチャンネルが使えなくなったためです。

こうした状況をどこまで想定して華人が野党に票を投じたのか。スランゴールやペラ、ジョホールの選挙結果を見る限り、新村が多い地域ではおおむね野党の、とりわけDAPの候補者が当選しています。新村の人たちは連邦政府とのチャンネルを失う可能性も想定して野党に票を投じたのか、あるいは連邦政府とのチャンネルを失っても特に問題はないということなのか。このあたりは調べる必要があるように思います。

華人組織からは、MCAが入閣しないのは困るという声が出る一方で、華人の代表者を政府に送る必要はあるけれど、代表は必ずしもMCAである必要はなく、野党や政党以外の華人組織から適任者を任命することも検討してはどうかという声も聞かれます。

なお、DAPはBNに入るという選択肢はないと言っています。BNが政権を執る州の郡議会や市議会でもDAPの党員が議員となることもないとしています。

■ 華人はDAPにUMNOのチェックを期待するもBNに入ることは望んでいない

山本 今回の選挙では政権交代の可能性があると考えられていたので、DAPに投票した人は野党に入れたのではなく与党に入れたつもりだった可能性もあると思いますが、PRが政権を取れなくても野党のままでもかまわないと考えているということですね。

篠崎 DAPに与党になってもらいたいという期待は華人の間に強くあると思います。しかし、DAPがBNに入ることはあまり期待されていないように思います。

山本 BNが勝った以上はBNに入っておかないとまずいとは考えないのですか。野党に留まってもBNには入らないという覚悟ができたということでしょうか。

篠崎 そこはどうなのか、判断しかねます。UMNOと連立を組む政党がいるから、UMNOの優勢が維持されていると考えて、MCAやGerakanを支持せず、DAPがBNに入ることも期待しない。DAPにはUMNOをチェックする役割をおおいに期待するけれど、それはBNの外からでも十分可能で、最終的に華人にとってよりよい政策が出てくればそれでよい。おおかたの華人の考えは、おそらくそういうことではないかと思います。しかしそれは、MCAやGerakanを通じて政府とのチャンネルが維持されることを前提とした考えかもしれません。あるいは、政

府に繋がる既存のチャンネルを失うことも覚悟のうえで、UMNO中心の政治のあり方をとにかく変えたということかもしれません。チャンネルを通じて政府からもらえるものがたいした価値を持たなくなりつつあるということもあるかもしれません。